

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530944

研究課題名(和文)日本における学校化社会の形成過程 教育制度の社会史の視点から

研究課題名(英文)The formative process of the Schooling Society in Japan

研究代表者

木村 元(KIMURA, Hajime)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：60225050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、学校化社会の形成に向けての学校受容の過程の解明を目的とした。そのために、1930年代から高度成長期までを一つながりのスパンとして時期区分して、収集した関連資料を整理し、資料集と研究書を刊行した。さらに、学校化社会を中心的、周辺的部分に分け把握しその構造をとらえるための検討を行った。すなわち、中心的部分の変動として、学校から得た知識をそれほど重視しなかった農村共同体における学力問題に注目して論考を示した。他方、周辺的部分として学校化社会の周縁を様々なレベルで設定し、そこに位置した諸学校に検討を加え今後の検討のためのドラフトを完成させた。さらに学校の戦後史についての時期区分を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the process of school acceptance through the formative process of the schooling society. School acceptance means the situation that almost students commuted to school and completed the compulsory program and a majority of students went to higher level school. Forty years from the 1930s to high-growth period are regarded as a consecutive time span, not as being divided by the WW. This study is based on the materials related to important human formation theories and statistical data.

We try to capture the structure of schooling society of Japan by using the center-periphery framework. As for the center of the schooling society, our monograph and book that were edited through this research portray the penetrating process of scholastic ability through a farm village community. As for the periphery of the schooling society, the research on various schools in Japan shows the background and the problem of the development of the schools.

研究分野：教育学・教育史

キーワード：教育制度の社会史 学校化社会 東井義雄 夜間中学 朝鮮学校 工業高校 定時制高校 外国人学校

1. 研究開始当初の背景

だれもが学校に行くことを当たり前のこととして受け入れ、さらに学校を出ることが社会に参入するための条件となる、いわゆる学校化社会を実現させて半世紀を経たこんにち、改めて学校のあり方が問い直されているといえる。その傾向は、学校に行かない・行けない子どもの増加や、グローバル化の進行にともないさまざまな社会的文化的な背景を持つ子どもへの対応が求められる状況のなかに、象徴的に見てとれる。こうした新しい状況は、これまで見えなかった諸問題や課題を浮かびあがらせることにもなり、学校自体や学校に行くことが議論される構図を作り上げている。

近年において、戦後の6-3-3-4制の教育の再検討とそれぞれの教育機関の使命や役割の再考が指摘されてきた。高等教育のユニバーサル化がいわれ、それに対応した新しい学校体系の構築の必要から、中等教育の再定義を要請する議論もその一つである。そこでは、学校接続の積み上げ的なシステムのあり方が議論の俎上に載せられている。ここでの問題の提起は、学校体系の構成原理自体を捉え直す点でドラスティックな視点を提出しているものであるが、この議論の前提においても、人間形成が学校体系によってなされるという点については自明の問題構制となっている。さらに「学校化社会」というとらえかたについては、その画一的な抑圧性に対する批判や、脱学校的な視点に基づく近代批判の文脈からの位置づけが主とされてきた。

本研究では、学校化社会を、就学行動という人びとが共通して半ば意識せずにとる行為を含めた人間形成の方式の変化(転換)に注目して、その成立をとらえている。学校が人びとに受け入れられることによって、学校が外側からの要請に対応しながら独自に内側の実践をつくりあげていくという、葛藤や矛盾を含んだ学校の文化や工夫に注目する。そのうえで、社会と学校との関係を描くためのアプローチとして教育制度の社会史研究の枠組みをもちいて、人びとの生きられた学校受容と学校への包摂の過程を検討することで、学校化社会の基盤にあるものをとらえだそうとするものである。

2. 研究の目的

義務教育を修了した後もなお学校に通いつづけようとする行為が定着する地点を、学校システムの起動として仮設した。1930年代において学校システムを構成する積み上げ式の学校体系にもとづく人間形成の方式の受容を捉え、その諸相について検討することで、戦後の教育を準備する諸動向を示してきた。本研究では、その転換をより精緻に実

証し、かつ1970年代初頭までを、高校進学によって、10代(ティーン・エージャー)の学校への包摂が完成する時期としてとらえ、日本の戦後教育の歴史的な特質を示すものである。

3. 研究の方法

研究課題を遂行するために3つの研究項目を立て、総括する。1930年代を学校の定着の起点とみなし、1960年代にまで繋がる：学校システム内外の諸システムの展開を軸に社会変動や教育人口動態等の検討も踏まえて、戦前戦後の連続性の検討を行う。そのうえで：一条校と各種学校、さらにそれぞれの周縁に配された学校にかんする諸資料を収集しながら、学校化社会への包摂と排除の様態を描き出す。それを踏まえながら、主として戦後から1960年代(1970年代初頭)までの学校の展開について仮説的な見取り図をえる。さらに：教育学の動向に目を向けペダゴジーの反省の領域に視野を広げ、日本の学校化社会の形成過程の固有性を教育の内的変化に留意して浮かびが上らせる。

その際に、こんにちの遡及的な見方ではなく、これまでとは異なった選択肢として現れた当時の学校が、どのように受容され形成・定着してきたかについて、本研究では、学校制度秩序でいうならば周辺におかれている学校に注目して課題に迫る。

戦後の学制は「一条校」を中心に整えられ就学が推進されるが、それはすぐに実現したわけではない。さまざまな学校(課程)を一条校の内外に配し、あるいはそれらを認めることで新しい学制を定着させていった。新しい学制をとおした学校化社会の実現は、その秩序が及びにくい周辺部に支えられながら、他方で、周辺の排除と包摂が進められる。夜間中学、工業高校、定時制高校、朝鮮学校などの位置づけをめぐる議論はその例としてあげられよう。それらの学校の組み込まれ方が、こんにちの学校化社会の性格を定めると本研究ではとらえている。これらの学校にとどまらず、外国人学校や個別の状況を抱えた地域にも視野を広げ、学校化社会への動きを広く位置づける。その際、本研究での「周辺」と「中心」というとらえかたは固定的なものではなく、動的で相対的なものであり、互いに深く関わり合っただけでそれぞれの性格をつくりあげているものとしてとらえる。「一条校」を中心になりたっている戦後の学制の性格は、「周辺」に位置づけられている諸学校との関係で、その性格が浮かび上がるものであると本研究では押さえた。

4. 研究成果

本研究の目的は、日本の学校化社会の成

立・定着過程をみることで、その特色や性格を解明することである。そのための基本的な準備を行った。戦後学校制度の鳥瞰のうえに、諸学校の研究の状況や資料やデータ、さらに検討のための基本的な論点や立脚点などを提示した。

(1) 1930年代から高度成長期までの重要な人間形成論や統計資料の収集を行い、検討を加え、資料集の刊行とそれをもとにした著書を刊行した。

(2) 人間形成論や教育論を分析するための基本カテゴリーを検討するための整理を行い、その検討の結果を踏まえたテキストを刊行した。

(3) 学校化社会の形成の中核として、農村部の共同体に学力が浸透する過程を検討対象にした。兵庫県但東町の東井義雄の実践を社会構造の検討と学級の検討を踏まえて明らかにした。子どもたちへのインタビューを踏まえた論考を発表した。

(4) 戦後日本の地域と学校の展開についてこれまでの研究を踏まえた展開史を戦後日本社会研究の一環として刊行した。

(5) 戦後の学校の展開について、日本の近代学校の展開というマクロな枠組みを踏まえた新しい枠組みを示した新書を上梓した。

(6) 奄美諸島の調査をふまえて、戦後が遅れた地域の学校の展開に焦点を合わせたドラフトを示した。

(7) 学校化社会の各レベルの周縁にある諸学校として、工業高校、定時制高校、夜間中学校、朝鮮学校、外国人学校などに注目し、それぞれの研究を踏まえてドラフトを完成させた。これを中核に報告書を作成した。学校化社会の形成過程と展開に関する仮説的な時期区分を行い、そこで浮かび上がってきた学校システムの周辺に位置する学校について収集した資料と研究の整理をもとに基礎的な論考をつくりあげた。人間形成の方式としての学校のあり方が問われている現在において、改めて周辺の学校の個別に注目し、そこで形成されてきた諸問題を戦後の学校の中心的な価値と比較しながら検討を深めて行くことを本研究の課題とした。

[報告書タイトル]

日本における学校化社会の成立過程
その基礎的研究

[目次]

はじめに

- [1] 学校化社会の成立と展開
- [2] 中等教育の拡大と均質化
- [3] 夜間中学から見る戦後日本社会
- [4] 工業高校の制度的展開と卒業者の職業生活
- [5] 定通教育の再編と教育の機会均等
- [6] 戦後日本の外国人教育政策の展開
- [7] 外国人集住都市と南米系外国人学校の諸相—他の外国人学校の状況を交えて

[8] 地理的脆弱性を有する地域の戦後教育史—奄美群島の固有の位置をめぐって

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

(1) 江口 怜「学校社会事業としての夜間中学：1950-60年代の京都市の事例に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53巻 2013年 7-17頁 査読有

(2) 木村 元「学校化社会への過渡的様態としての「村を育てる学力」 その土壌と葛藤」『<教育と社会>研究』22号 2012年 39-48頁 査読無
<http://hdl.handle.net/10086/26390>

[図書](計5件)

(1) 木村 元編『教育学』 医学書院 2015年 264頁(1-70頁)

(2) 木村 元『学校の戦後史』 岩波書店 2015年 224頁

(3) 木村 元 他『シリーズ戦後日本社会の歴史2(社会を消費する人びと)』 岩波書店 2013年 288頁(97-125頁)

(4) 木村 元編『近代日本の人間形成と学校 - その系譜をたどる』 クレス出版 2013年 386頁(1-13, 70-83, 227-239, 353-367, 384-386頁)

(5) 木村 元編『人間形成と社会 - 学校・地域・職業』 クレス出版 全21巻 2012年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 元 (KIMURA, Hajime)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：60225050

(2) 連携研究者

松田 洋介 (MATSUDA, Yosuke)
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：80433233

前田 晶子 (MAEDA, Akiko)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号：10347081

吉村 敏之 (Yoshimura, Toshiyuki)
宮城教育大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80261642

船橋 一男 (Funabashi, Kazuo)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：80282416

(3)研究協力者

神代 健彦 (KUMASHIRO, Takehiko)
京都教育大学・教育学部・講師
研究者番号：50727675

白松 大史 (SHIRAMATSU, Taishi)
一橋大学・大学院社会学研究科博士課程

吳 永鎬 (O, Yongho)
一橋大学・大学院社会学研究科博士課程・
日本学術振興会特別研究員

江口 怜 (EGUCHI, Satoshi)
東京大学・大学院教育学研究科博士課程・
日本学術振興会特別研究員

濱沖 敢太郎 (HAMAOKI, Kantaro)
一橋大学・大学院社会学研究科博士課程

奴久妻 駿介 (NUKUZUMA, Shunsuke)
一橋大学・大学院社会学研究科博士課程

山田 宏 (YAMADA, Hiroshi)
一橋大学・大学院社会学研究科修士課程